

一九四五年六月十日及び七月七日の千葉空襲

この文章は、1976年、千葉県戦争体験記録をすすめる会が刊行した「戦争体験の記録3」の記事に日暮幸子作「会えなかった池田さん」(p58-66)から全文引用したものである。もともとこの文章は「生きがいのきろく」に掲載されたものである。日暮幸子(さちこ)は1911年生まれで、空襲時34歳だと推定される。この文章は第28回千葉県展(1975年11月)で入賞した油絵「あの日を忘れない」の内容がよく一致する。時期も一致している。この絵画は、空襲を描いた唯一の記録であろう。彼女は鋭い観察眼をもって被災地を歩き、彼女が池田さんに代わって空襲時の惨禍を表現する作風を取り入れている。また、彼女は焼夷弾を持ち帰り、分解して調査しており、強い探究心の持ち主である。千葉空襲の写真はまだ発表されたものはない。絵画や写真はいずれも戦後の復興の物である。よって、日暮幸子のこの絵画と文章はリアルさに於いても、芸術的にも価値がある。「会えなかった池田さん」と題しているが、千葉市空襲の全体及び当時の社会体制を正確に描いている。(編集:千葉市空襲と戦争を語る会伊藤章夫2016.10.5)

会えなかった池田さん

日暮幸子

初めての空襲

後の記録によるとこの月の一日にはヒトラーが自決し三日にはドイツが降伏している。イタリアのミラノの陥落はその四日前、すなわち四月二十九日であった。天長節(注1)である。

日本はついにこの二つの同盟国を失い孤立状態に置かれた。泣き面に蜂の類いで空襲は大型化され大阪の岩国方面へ三百五十機、名古屋へ四百機、そして横浜へは実に六百機、息つくひまもない連日連夜の波状攻撃である。

ついに私たちの千葉市にもその攻撃の手が伸びてきた。

六月の十日。

爆弾を積んだB29はその日私達のK町(注2)までこなかった。手前の市街地へきたのである。そこで爆弾を播いたのである。千葉は「軍郷千葉」の別称があるくらいなのでいずれ狙われるとは思っていたが意表をつかれた感じであった。

私はその日爆弾が身近かに落下する時の音を初めて聞いた。ヒュルヒュル、絹の布をこするよう不気味な音のあと、ズシーンと頭から尻の穴に抜けて行くようを凄まじい音である。午前八時だったので職員も生徒も穀おかた登校し出勤していたので警戒督報を聞いたあと直ちに生徒を家庭へ帰宅させ、出勤していた職員だけで防空体制に入っていたように記憶する。このときの爆げきがどれくらい続いたかよく覚えていない。しかし被害は死傷者三九一名、罹災戸数四一五と後の調査に出ているところを見ると被害地の人々にもまさかまだ千葉はやられまいという油断があったのだろう。市街地の先生方にはこの日別状はなく私たちはまずほっとしたのであった。

翌日、学校では早速被害を受けた女子師範学校と堀一つ隔てているF小学校(注5)へ跡仕未の手伝いに出かけた。

「あらまあ、ひどいこと、ごらんなさいよ、あそこ」

被害地の近くに電車(注6)が近づくと同行のEさんが叫んだ。作業中、爆風にあおられたのか、

国鉄の機関庫の高い電線の上に青い作業衣が引っかかっている。その情景はいまでも臉から去らない。

女子師範学校の敷地の中には直徑五メートル余もあるかと思われる大穴があちこちに口を開けていた。たしか寄宿舎の生徒になにがしかの怪我人が出たという話を聞いた。その少し海岸寄りの病院はかなりの被害があり数人の患者たちとともに院長夫妻もこの犠牲に会ったとか。

同僚たちと病院の被害の跡を辿って行くと夥しい土砂と建物との散乱の中にどす黒い血の滲んだ脱脂綿や包帯や綿の飛び出たふとんや毛布敷布などがあちこちに引っかかっていたりして目をおおいたくなるようを惨状であった。目的の F 小学校（注5）へ行くとここもまた無惨を姿をさらしていた。床も廊下も机も椅子もガラスの破片をかぶりうつかり手足の出しようもない。子どもたちがいなくてよかったわね」

Eさんが溜息まじりにいう。まったくそれを思うとぞっとする。幸い、子どもたちは警戒の段階で帰宅させていたのだ。私たちは帯で片隅の方からガラスの破片を掃き寄せ片付けて行った。

「うちの近所の娘さんでね。壕に入るのが一分おくれて、えん側まで出たところを爆風にやられたんですって。内臓が出ちゃって、<おとうさん苦しいよう、苦しい殺してよう>って行ってたんですって、おとうさんも手の下しょうがなく、そのうち、娘はなくなったそうなの」被害地の近くから通ってきているTさんがそういう話をしたとき、みんな聞いて声も出なかった。

「あんたの方は一」上席のEさんが黙って側で聞いている池田さんの方へ声をかけると池田さんはおもむろに口を開いた。

「私の方は少し離れていたの、でも恐かったわ、今度はこっちの番かこっちの番かと壕に入っても生きた心地がしなかった」さもあるう、被害地から歩いて二十分の場所である。

死にたくない

千葉へ爆弾が落ちてから学校では子どもたちに爆弾を落とされるときの訓練を続けた。すなわち死角で難を免かれるように素早く「伏せ」の姿勢をとる訓練であった。

体操の時間になると笛の合図で一秒の間に地面へ「伏せ」をするのである。しかし直径四、五メートルもある爆弾の大穴をいくつも見てしまっているためこの訓練がどれだけ役立つだろうと考えると自信がなくなった。一番いいのは警報が出たら一刻も早く壕へ待避するように教え込むのがいいように思える。学校の講堂の裏の土手に横穴もたくさん出来た。しかしそこの横穴も近くには無線鉄塔があるのが気がかりであった。

このような訳で学校の勉強は教える方も教わる方もさっぱり身が人らなくなってしまった。

<もし日本が負けたらどうなるかしら>

<さあ>

<みんな殺されると思う。それともアメリカ人の自由にされ奴隷のようにこき使われる>

<そんな情けをないこといわないでよ。みごとに戦局を挽回するという噂もあるわ。いざというときのために強力な軍隊と兵器があるそうよ>

<ほんとかしら>

<だって日本はこれまで一度だって負けたことないでしょ>

<そりゃそうだけど、こんなにやられっ放しで挽回なんてできるかしら、最後の兵器があるなんて、信じたいけど、あたし信じられないな>

宿直当番の夜は狭い暗い宿直室の中で女の先生方はよくそんな話をした。甘い観測をしている人も悲観的な見方をしている人も同様にその心底に隠し切れぬ不安をのぞかせていたのは否定できない。もはや、バケツリレーも火はたきも竹槍も神だのみもひどく空しいものに思えた。疎開してきたE工場が動かないのは作る材料がもうとっくに底をついてしまっているのだということをやってくる工員のひとりが漏らした。召集された兵隊が地下足袋をはいているのを見て私は驚いた。さらにゴボウ剣（短剣）がなくなって丸腰になったという噂も、水筒の代用品として太い竹筒が使われ始めたという話も聞いた。しかしこれは見たことがないので真偽のほどは分らない。このよう話を開くと民間の物質の欠乏どころか軍隊にまでも大きな影響が出てきたのかと驚かざるを得ない。アメリカ軍はわが国のこのような欠乏のどん底などにお構いなく一層爆撃の手を強めてくる。日本列島の至るところに空襲が行なわれている。B29の爆撃機のこないときはその敏捷さに物をいわせてP51（P21 戦闘機のこと）がやってくる。やってきては軍事工場や駅や官庁の建物を狙う。前にも述べたようにPは警報と同時ぐらいにやってきてしまう。季節は梅雨に入り、くる日もくる日も鬱々たる明け暮れであった。

「あら、またきた」

生徒を帰したあと、私たちは警報が鳴ったがまだ警戒の段階だったので職員室でとりとめない雑談を交しながら事務処理など続けていた。急にけたたましく空襲警報が鳴り出しみんな慌てて防空頭布や鉄兜を頭へ乗せ、中央昇降口に殺倒した。壕の中へ入るとまだ池田さん（注6）がきていない。

「どうしたのかしら」

「たしかまだか教室にいた筈よ」

「呼んでくる」

壕を出て昇降口へ走った。すると職員室の前の廊下を走ってくる池田さんの姿が見えた。

「早く早く」

手を振り池田さんを急かしたとき私は戸外にPの爆音を聞いた。同時に機銃の音を聞いた。

「死にたくないっ」

池田さんが叫び私ももろとも昇降口の飛び箱の間に身を投げた。耳をふさぎ生きた心地のしない中で私はビュンという鉄板に当たる弾の音を聞いた。どれだけのときが過ぎたか記憶にない。解除の警報を聞いても直ぐ立上る元気を失っていた。悪夢から覚めたような気持で外へきた。出たとき第三校舎の軒のところに雨ざらしになっているE工場の機械の鉄骨が目に入った。もし自分たちが一歩でも昇降口の外へ出ていたらまさにPの餌食になっていたかも知れない。雨ざらしの鉄骨を見たが気持が動転していて**散弾**の痕跡が発見できなかった。池田さんの顔はまだ血の気がなかった。

勝利の日まで

丘にはためくあの日の丸を

仰ぎ眺めるわれらのひとみ

いつか溢るる感謝のなみだ

われらみんな

勝利の日まで 勝利の日まで

戦争の中で生れた数々の歌の中でこの「勝利の日まで」の歌は最後に生れた歌ではなかったか。激しい空襲と物資の欠乏のどん底の中で国民の士気を振り立たせる目的でこの歌は作られたので

あろうが、私はこの歌を歌うと涙が溢れてきてしようがない。空しさが先立つのである。「勝利の日」を迎えるより「敗北」の日が近づきつつある予感がする。

学校ではこの歌を集合台の前に全生徒を集め音楽に堪能を池田先生（注6）が指導した。集合台の側に海老茶色のベビー・オルガンが運び出まれそこで誰かがそれを弾き、池田さんが台の上で指導をしたのを覚えている。

「三、四、はいっ 丘にはためく あの日の丸を」

一節ずつ池田さんが範唱してはあとから生徒がそれに従った。

「はいっ、もう一度 丘にはためく、あの日の丸を」

七月の太陽の下で池田さんのこめかみから玉の汗がいくすじも流れた。着ている黒の縞のモンペの上下はおとうさんからのゆずりだと今朝聞いた。おとうさんのよそゆきの縞の羽織が娘のモンペに化けたのである。

仰ぎ眺めるわれらのひとみ、はい、

あおぎ眺めるわれらのひとみ

「止め、あかぎの「ぎ」 妓鼻濁音ですよ、「ぎ」と強くならないように！」

潔癖である。私なんかだったら鼻濁音かどに関係をなく歌わせてしまうのに彼女は正しい発音を要求する。だが生徒の方はそれについて行けない。もどかしそうを池田さんの顔。

千葉は全滅か！

暑い日であった。夜も暑い夜になった。だが久しぶりにここのところ夜の爆撃が夜hので熟睡が得られそうである。

モンペを脱いで何日ぶりで洗濯した浴衣の寝巻をつける。爽やかである。せんべい布団の上に大の字になる。束の間の安息かも知れない。深い深い眠りに落ちて行きそうだ。そのまんま覚めない眠りであっても悔いがなさそうに思える。いつの間にか眠ったのだ。どれくらいのときが経ったか。とにかく、断続的に鳴るサイレ／の音に叩き起された。起きたが暗がりの中で方向が分からない。手さぐりで枕もとのものをたぐり寄せ着替える。モンペの紐がこんがらかって結びにくさに焦ら立ちながら鉄兜を頭へ乗せ外へ飛び出した。

爆音の方向は東の方だ。見ているうちに凄じい爆音が続く、空がまっぴかりに走る。

「千葉がやられている」

誰かが路上で叫ぶ。たちまち千葉の空は焼け爛れる。

「あかりなんか消したって消さなくたってなんにもなんねえ」

道すじも家々の屋根も電信柱もみんな手に取るようだ。月夜とは別の明るさだ。不気味な明るさが頭上まで広がってくる。B（B29 爆撃機のこと）は波状型できているのか、爆音が大きくなったり小さくなったりする。火の見櫓のサイレンは鳴り続けている。しかしみんなあちこちの路上にかたまり合い呆然として爆撃の続く千葉の空を見守るだけ。そこまでの距離は十数キロしかない。

「千葉は全滅だべ」

誰かがいうと初めてわれに返り自転車を飛ばす者もいた。学校のだらだら坂を走ってきた私の後から数人の警防団の人たちが自転車で走って行った。私は自分の足がもつれるように感じた。運動場の西端の壕のところに近づくといつも集まる同僚がきていた。

「千葉が全滅だってよ！」

「うむ、聞いた、聞いた」

教頭先生が頷いたとき突然後方で爆音がした。

「きやがった。入れっ」

みんな慌てて壕の中へ飛び込んだ。

学校の中へ軍需工場が疎開してきていることも軍隊が駐屯していることも敵は電波探知機のように知り尽くしているに違いない。私たちの頭上を巡回しているのか B の爆音がときには近くときには遠去かった。そのうちに何か弾けるような不気味な音がした。並んで腰をおろしていた L さんが私の膝にしがみついた。L さんが千葉に爆弾が落ちてから学校の前の民家に間借り生活をしてきた。B の爆音が去ってまもなく壕の外にいた O 先生が怒鳴った。

「花園町が燃えているぞ、焼夷弾を落されたらしい」

出て見ると学校の校舎が真赤だ。爆音の去るかを見定めると私たちは火はたきやバケツを持って丘の方へ走った。花園町は田んぼを一つ隔てた向うである。

町といってもそこはまばらな人家で燃えているのは「工業学校」らしい。「工業学校」はまだ設立してまもない。戦争の中で生れた学校である。

すでに消防団がきて放水していた。救援の手が早かったとみえ校舎の全焼は免れた。私たちは火から書物を守るため図書館の中から夥しい本の山を手分けして安全地帯へ運び出した。その日、そこで私は初めて敵機の落した焼夷弾の空を一本拾った。長さは一メートルはなかった。六角形の硬鉄で上等のフライパンが二つできた。(鍛冶屋に頼んで) 中味はもちろん空っぽであったが隅の方に質のいい飴色のゴムと水色の布きれがついていたのをよく覚えている。

死臭の町

翌旦 出動するとやはり千葉市内から通勤している先生方はきていなかった。

あちこちと連絡を取りおおかたの職員は無事であることが分ってきた。不明なのは池田先生であった。

校長が集まった職員に説明した。

「確か池田さんは栄町(注2)だったな！」

沈痛な面持で校長が報告を始めた。私はその終りまで聞けない。

耳をふさいだ。職員室の中に息苦しい沈黙が続いた。とにかく、私たちは出かけた。私は雑囊の中にありったけのコメをはたいてごはんを炊き純白のにぎりめしを作った。途中、電車で行けるところまで乗って行った。どの駅であったか覚えていな凄。とにかく電車の中から見るといままでその半分しか見えなかった県庁の建物が丸見えなのである。

爆弾の時跡始末にきた F 小も何もかも県庁から手前焼け野原である。電車から降りると焼け野原のあちこちにまだ余塵が立ちこめ異様を臭気が漂っている。うっかり歩き出すと運動靴の底がぶすぶす燃え出す。トラックが数台動いている。止まっているのもある。止まっているトラックの周りに黒服の警防団の人が群がっている。群がった団員が材木をトラックに積んでいるのかと思ったのは大變を誤りであった。焼死体であった。男女の別なく黒い丸太棒と化した焼死体であった。

「栄町はどっちでしょうか」

「さあ？あの辺かな」

ひとりの団員がいった。私はその辺りへ足を運んだ。

「あのう、ここ栄町でしょうか？」

焼け跡を接ぎ回している人を見つけてたずねたが答えがない。

「あの栄町は……」

しかし池田薬局（注6）についてもその住人についても何も知ることができない。も力もない。地獄を経てきたばかりの人間にまともな答を求める方がどうかしている。向うから駆けてきた警防団のひとりをつかまえて聞いた。

「ああ、その人たちは、とにかく院内のお寺の方へ行って下さい」

猫の手も犬の足も借りたい忙しさの中の団員からやっとそれだけの手がかりを得て私は焼け残った市街の左手にある院内の寺へ足を向ける。旅館の多かった千葉駅の辺りも見ると影もない爆撃と焼夷弾の跡だ。

ふと焼けトタン坂の下に人の髪の毛を見て中を覗くと五、六才だろうか、それとも七、八才だろうか、女の子のおかっぱ頭が見えた。顔が向うむきなのが救いであった。人目にその姿をさらされるのを憐れみ誰かがトタンを載せたのか。髪の毛が無事であるところを見ると煙に巻かれたのか。院内のお寺へついたが池田さんに会えなかった。遺族でもないものは入らせてくれないのである。それでもそこに居合せた人たちから当時の模様を聞くことができた。Bの焼夷弾は逃げ道をふさぐようにまかれたため周りから火の手が上がり壕の中はその火の勢でむし焼きにされるような熱さだったという。

外へ出れば爆弾、焼夷弾、そしてPの狙い打ち。

「壕から出ないで下さい。壕から出たら危険です」

熱さに耐え切れず壕から出ようとする人たちを警防団や隣組長がしきりに怒鳴って歩いたという。しかし池田さんはついに熱さに耐えられず壕の外へ飛び出した。そこを焼夷弾にやられたという。しかもあとに続いた妹さんまでも。細い黒縁の目がね、その奥の一重瞼の優しい限差し、いつも健康そうに赤らんだ丸い頬。

<父のゆずりなの>

黒の絹のモンペの上下。

<いいですか、鼻濁音で歌うのですよ、はいっ、三、四>

Pがやってきたとき、<死にたくないっ>と絶叫し昇降口に突伏した池田さん。

本当に死にたくなかったろう。まだ二十二か三だもの。死にたくないからみすみす蒸し焼きにあう前に生きられると思えば外へ飛び出したのだ。妹さんもその姉さん（注6）を追って！

爛れたように陽が西に傾き始めているのも忘れて私は死の街をさまよった。

もう一人会いたい人がいた。大学病院の下の方に住むOさんである。

色白のまだ若い同僚である。そこは焼けなかったが多くの犠牲者を出しているという。空襲の際、市民が逃道として空襲対策本部からその方面の人たちに指定されていたコースであった。こうしたコースは市内の何箇所かにあった。しかし敵機はそうしたコースを全部爆弾で破壊しておいてから周囲へ焼夷弾を落したのである。

袖ヶ浦や出洲方面へ逃げた人々は海の中で空から機銃掃射を受けかなりの人が亡くなったという。千葉国立病院の裏手には約二間か三間くらい堀割があった。

この堀割の土手つたいに田んぼの方へ逃げようとした人たちも機銃でやられ血まみれになって

堀割の中へ転落したという。火の見櫓のある大和橋を渡り切ったとき私は愕然とした。二才ぐらいの男の子を背負った母親が走力出した格好で橋の襖のところに倒れていた。

機銃でやられたのか、煙に巻かれたのか、目にしたとき、私は息を呑み二、三間吹飛んだ。強烈を印象であった。走って病院の裏通りを抜け裏門を過ぎ、Cさんの家の扉の前に立った。

叩いたが返事がない。<××郡××村へ行をます>と慌しかったのだろう表戸に小さき紙片が貼ってあった。とにかく無事だったと開いていたのでそのままそこから引返した。

引返したといってももちろん別の道であった。別の道を選び私はもう一軒の知人の家へ向った。

知人の家は県庁と都川を一つ隔てた手前にあった。知人のK氏は私の家で亡くなった東大生Sの恩師で葬式を万端引受けて下さった人であった。年老いた母堂とふたりでK氏はわが家の焼け跡に立っていた。母堂はくすぶる板切れや瓦解を棒切れで引掻きながら何かを捜していられる風であった。K氏はさすが疲れ切った表情であったが、私の姿を見ると微笑しくすっかりやられました>と弱弱しく笑った。奥さまとかお子さまたちは箱根の別荘に疎開させていたのはまことに不幸中の幸であった。

すでにK氏は東京の本宅を空襲でやられている。千葉へ居を移したのは昨年秋だったか。焼失を免れたものは池に投げ込んだ小さなトランク一つであった。

「でもおかあさまも先生もご無事でなによりです」

私は雑嚢の中のにぎりめしと肩の水筒を外した。母堂とK氏は焼け棒くいや板切れの浮んでいる池の側の庭石に腰をおろしそれをおいしそうに頬張った。

「こうなったら寮にでも入ってしばらく学生たちと一緒に暮すつもりです」いった。

まだ余塵と異臭の漂う辺りを見やりながらK氏はつぶやくようにいった。

今後の日本の成り行きについて一度聞いて見たかったが相手が科学者であることを思いそのまま帰路についた。夕陽に染った焼け跡を歩みながら私はもうBがきてもPがきても構うものかという絶望的を気持になっていた。後の記録によるとこの空襲で死傷者一、二〇四人、罹災戸数八、九〇四とも八、三八九戸とも出ている。いずれにしても犠牲は大きい。

来襲したBは百二十機であった。（「生きがいのきろく」より）

注1 「天長節」：天皇の誕生日を祝った祝日。明治6年（1873）国の祝日とされ、第二次大戦後、4月29日は「天皇誕生日」と改称され、昭和天皇死後2007年に「昭和の日」となった。

注2 「K町」：

注3 「海岸よりの病院」：千葉病院のこと。6月10日の爆弾空襲で破壊され、「千葉市空襲の記録」によれば死者数は「数十名？」と記述されている。しかし正確な人数はわからない。戦後この病院は解散している。

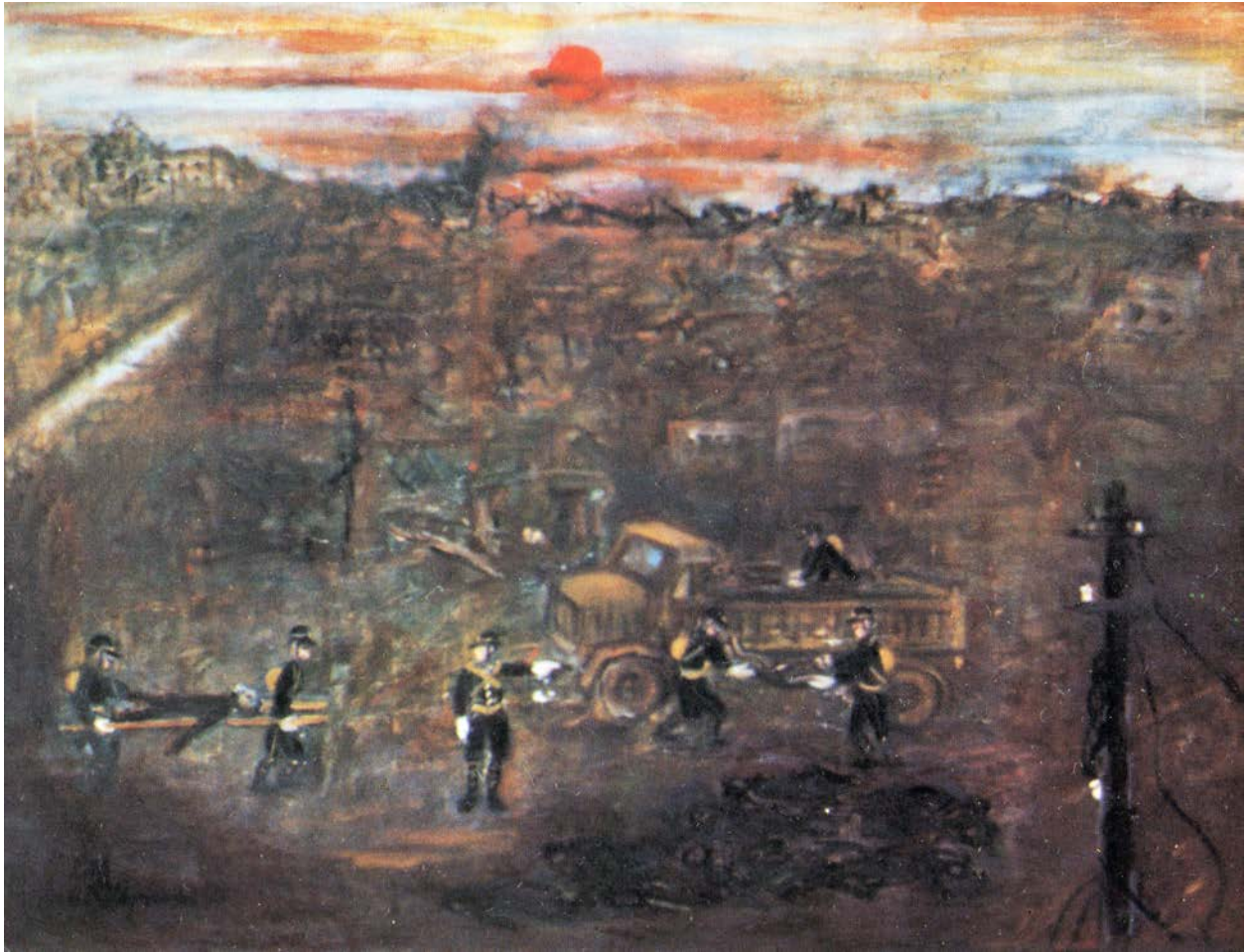
注4 「池田さん」：千葉市立都賀国民学校（現在千葉市稲毛区作草部町938番地）の教員で池田とし（姉）、妹は千葉高女生徒の池田清子。いずれも池田薬局の家族であった。薬局は千葉市中央区中央に現存する。（敬称略）栄町と中央との関係に改称。

注5 「F小学校」：当時の千葉県女子師範学校附属小学校のことで、女子師範学校の敷地であった。6月10日の空襲は日曜日なので、学童に被害はなかった。女子師範学校は学校工場が24時間操業しており、空襲時は夜勤組と日勤組の交代・引き継ぎ時間帯であったので被害が小さくない。

注6 「電車」：京成電車が省線電車のこと。京成は、当時女子師範学校の脇を通り、現在の中央公園が千葉駅終点となっていた。この駅も空襲で被害があった。日暮幸子は京成の黒砂駅（みどり台駅）あたりから、あるいは国鉄稲毛または西千葉駅から国鉄千葉駅前まで来たのであろう。

注7 「国立千葉病院」：千葉陸軍病院、現在独立行政法人国立病院機構、今も千葉市中央区椿森の構内に赤レンガの門柱がある。

7月7日千葉市空襲の夜が明けて



「あの日は忘れない」1975年11月第28回千葉県展入賞 日暮幸子作品